

## ◆クサビラ様

ホウエン地方のトウカの森近く、山間にあるとある町には、通称「キノコ神社」と呼ばれる小さな社がある。祭神はキノガッサで、クサビラ様と呼ばれ親しまれている。クサビラとは漢字で茸、または菌と書くそうだ。

山の中の、いかにも菌類が好みそうなじめじめとした場所に立っているこの社の起こりには次のようなエピソードがあるという。

昔、このあたり一帯でひどい飢饉があった。何日も何日も暗い雲が空を覆い、米が育たず、人々は餓死寸前にまで追い込まれた。そんな時、山からキノガッサがたくさん眷属を連れて現れたのだという。彼らは人里に下りてくると身体を揺すり、尻尾を揺らし、村のあちこちにキノコの胞子を撒き散らし始めた。

人々は恐怖した。というのも、キノガッサやその眷属であるキノココの撒き散らす胞子には強烈な毒があつて、ひどく痺れて痛んだり、腹痛を引き起こしたりすると知っていたからだ。

それだけでは無い。彼らには一種の後ろめたさがあった。かつてこの地に人々が入植した際、山の木を倒し、獣達を追い出して田畑を作ったからだ。だから、人々はこれを機会に茸の物の怪達が復讐を果たしに来たのだと思ったのだろう。

撒き散らされた胞子は一晩で成長して、村の

道端やら、地蔵やら、民家の柱やら、あちこちに大きなキノコが生えてきた。最初、人々は罨だとか、毒があるとか、口にしたら死ぬなどと噂し合ったが、何しろ腹が減ってたまらない。

ついに一人が我慢できずに口にすると皆が食べるように食べ始めたという。

結局、誰一人腹痛を起こしたものはいなかった。そのキノコに毒は無かった。村人達はキノコのお陰で餓えから脱し、生き延びる事が出来たのだそうだ。

人々は社を作り、キノガッサ達を村の神様として祀る事にした。

その縁起から、毎年、町の人々は収穫の頃になると、その年に収穫した米とキノコを使い、炊き込みご飯などを作って収穫を祝う。農家でない家でも何らかのキノコを育てておき、食卓に乗せるという。町役場やポケモンセンターでしいたけの栽培セットなどを配布したり、育てたキノコやキノココの大きさを競うコンテストもあるという。

さて、キノガッサの胞子から育つキノコだが、通常は毒がある事は先ほどにも述べた通りである。では、伝説にあるように、人々が食べられるような無毒のものは育つのであろうか。

「毒性の弱いものを選び、交配して世代を重ねていく事で可能になると思われます」

カントー地方のタمامシ大学付属植物園のシラカバ園長は言う。

「果物や野菜の品種改良と同じです。より大きい実をとる為に大きい実をつける株同士を掛け合わせていくんです。近縁種と交配してみるのも方法かも知れませんね」

また、キノココやキノガッサを特定の条件下で育てる事によってある程度はコントロールが可能という研究もあるそうだ。

薔薇も愛でながら育てると棘が生えないと言われるから、それと似たような理屈なのかもしれない。